

YCU 第2クォータープログラム 派遣学生報告書

氏 名	S.H	学部・学科	国際教養学部 国際教養学科
学 年	2	派遣国	オーストリア
派遣大学	ウィーン大学		
コース名	German Summer Intensive Course		
期 間	2025 年 7 月 5 日～ 2025 年 8 月 3 日		

(1) 授業や課題、演習はどのような内容であったか。(800 字程度)

(可能な限り具体的に、印象に残った授業などの説明があるとよい)

授業は指定の教科書を用いて行った。初回の授業は簡単な自己紹介と、教科書の内容を少し進めた。授業開始から 3 日程度は、事前のクラス分けテストに基づいて配属されたクラスのレベルと自分のレベルを照合する期間でもあるようで、自己申請でクラスを変更することができるが、私はしなかった。また、もう 1 人の横浜市立大学から参加した島さんも私と同じクラスの A1. 2 であった。授業は 2 時間 45 分で、朝 9 時から開始した。授業開始から約 100 分後に 30 分の休憩があった。席配置としては、横浜市立大学のドイツ語会話の授業と同じでコの字型であった。初回の授業で印象的だったのは、他のクラスメイトは語彙が豊かで、自己主張や教師との会話はある程度できていたが、文法がうまくなかったこと、そして私たち日本人は文法においては問題ないが、自己主張や会話は全くできなかったということである。授業の流れとしては、まず初めに立ち上がり体を動かしながら、その動きをドイツ語で何というのかを学んだ。次に教科書の内容にそって文法や語彙を学び、その後、学習した内容を用いてクラスメイトとペアワークで会話練習をしたり文章を書いたりして、休憩時間に入った。休憩後は再度教科書に沿って文法や語彙を学び、最後に宿題を提示されて授業は終了する。授業では教師からの指名が適度にあり、宿題の答えや、動詞の語彙を聞かれることが多かった。クラスメイトと共同作業をするように指示された際は、必ずどこかのペアが教師に指名され、会話やつくった文章を発表するという形式がとられた。授業で大変だったことは、ドイツ語と英語を使うということである。具体的な内容として、教師は基本的にドイツ語でドイツ語を教えるが、第 2 言語として英語を利用する。新たな文法や語彙を私たちに説明する際は、英語を利用していた。つまり、英語でドイツ語の文法や語彙を理解しないとイケないということである。他のクラスメイトは英語を第 1 言語、第 2 言語(完璧に話す・理解することができる)者たちであったため、授業の進みも早く、ついていくのが大変であったり、うまく理解できなかったりする場合もあった。また、ペアワークについても、クラスメイトは英語を話した。私は、英語は理解できるが、うまく話すことはできないため、意思疎通が難しい場合がとて多く、うまくできないことが悔しかった。

(2) 授業を受けてどのような知識等が得られたか。(500 字程度)

授業を受けて、個人的には他のクラスメイトから学んだことが多かった。それは、間違いや無知を恥じないということである。彼らは授業中にいきなり疑問点を教師に質問したり、「これはドイツ語で何と言うでしょう」と教師がクラスに問いかけた際は、次々に単語を大声で発したりしていた。日本の学校ではおとなしく静かに授業を受けることが普通であり、私自身もそのような授業形態を受け入れていたので、彼らの主体的な態度は、私にとってとても刺激的であった。そして、たとえ発言が間違えていたとしても、本人も周りのクラスメイトも特に気にするような素振りはなく、本気で自分のためにドイツ語を学んでいるという姿勢が感じ取れた。文化の違いもあるかもしれないが、私自身は人目を気にして発言も質問もできないため、彼らを見習いたいと強く感じた。また、答えや文法を間違えた際には、周囲のクラスメイトがフォローしてくれたり、しっかり「これはこうだよ」などと説明してくれたりして、同じクラスメイトとして高め合っていく雰囲気が存在していたと感じる。彼らは良くも悪くも自己主張が強く、授業とは本来こうあるべきなのだなと思った。そして教師とクラスメイトの距離も近く、楽しみながら勉強ができて、良いことだと感じた。

(3) 授業を受ける前・受けた後でどのように（気持ちなどが）変化したか。(400 字程度)

プログラムの開始の直後は、多様なクラスメイトや、慣れない言語、慣れない生活などで、精神的にも肉体的にもストレスが多く、ネガティブになりがちであった。しかし、それらに段々と慣れてきた頃には、知っている単語が増えたり、クラスメイトや教師とコミュニケーションをとったり、ドイツ語の能力が上がっているという実感があり、とても楽しく授業を受けることができた。また、習ったことを、スーパーや博物館の受付など、実際に活用し、それが現地の人に通じるという成功体験がとても嬉しかった。プログラムの終了が近づいてくると、もっとこの場でドイツ語を学んでいたいという気持ちが大きくなり、帰国するのが少し寂しくなった。また、プログラムの参加者の年齢には上限が無いため、40 代のクラスメイトや、子どもをもつクラスメイトがいて、何歳になっても物事に挑戦するという意識や、物事を始めるのに遅いことはないという、新たな価値観を得ることが出来た。日本は固定的なライフコースが一般的であり、私もそれが普通だと思っていたが、彼らと出会って、私もいろいろなことに積極的に挑戦したいと思うようになった。

(4) 今後どう生かしていくか。どのように学業を進めていくか。(300 字程度)

私は後期にドイツ語実践を履修する予定なので、今回のプログラムで身に着けたドイツ語と共に継続的に勉強していきたいと思う。そして、その際は主体的に授業に参加し、単位の取得だけでなく、実際に活用できるように身に着けることを目指して取り組みたい。そして今年度のドイツ語検定で 4 又は 5 級を取得したいと考えている。また、私は個人的にドイツに興味があるので、これからの研究でドイツ語の文献を読んだり作品を鑑賞したりして、活用していきたいと考えている。